

カムチャッカ滞在記

重力研究部門 日置幸介

平成 8 年夏の約一か月間海外学術調査「オホーツクプレート運動の地球物理学的検証とそのテクトニクスの研究(研究代表者:北大 笠原稔氏)」のメンバーに混ざりロシア連邦共和国のカムチャッカ半島で GPS(Global Positioning System) 調査の機会を得た。新潟空港発のアエロフロート機でハバロフスク経由、カムチャッカ州都ペトロパブロフスク・カムチャツキーに到着した。ここの火山研究所をベースに、半年前に大噴火したカリムスキー火山で 10 日間の地震観測と GPS 測量を行い、その後オホーツクプレート運動決定のための固定 GPS 点を半島各地に展開した。後者は成果が出る数年後に改めて紹介するとして、今回はカリムスキー火山の探検行について紹介する。

カリムスキー火山では噴火前の地上測量網があり、GPS で再測すれば噴火のテクトニックな背景がわかる。火山周辺には無数の新しい割れ目ができ、メートル単位の地殻変動が期待できそうである。国情の違いのため GPS 観測の仕方は日本とやや異なる。調査出発の前日ロシア側の測地グループを率いるマグースキン氏のダーチャ(郊外の農園小屋)で打ち合わせを行った。彼は「重い荷物をかついで一日中山を歩けますか?」と心配そうに尋ねた。ロシアの測地学は足でかせぐのである。さらに「熊を見たことがありますか?」、カムチャッカのヒグマは北海道のそれより一回り巨大で狂暴だそう。重ねて「怖いですか?」熊さんへのあいさつを間違えると大変なことになるらしい。

道路がないので火山への足はヘリコプターである。時代物のヘリコプターに受信機やバッテリーその他をぶちこみ、カムチャッカ富士を眼下に見てカリムスキー火山の調査小屋へ約 30 分の空の散歩となった。地上測量の基準点は見通しのよい嶺々に設置されているため、初日はヘリコプターでそれらの嶺に一つずつ着

陸して GPS 受信機とバッテリーをセットして測量を開始した。ヘリコプターが町へ帰ってしまった翌日からが大変、昨日設置した受信機の回収と残りの点への移動は足がたよりである。さっそく朝からマグースキン親分と相棒のワシーリ氏と 3 人で、ヘリコプターで 10 分の道のりを、やぶを漕ぎ沢をのぼって 5 時間かかって嶺に到着、文明(ヘリコプター)の偉大さをかみしめた。山はあたり一面熊の糞と足跡だらけ、帰り道の沢でついに巨大な熊さんに数 10 m の距離で鉢合わせ。まわれ右したいところだが熊がどいてくれないと山小屋へ帰れない。一心になにやら食べていた熊もこちらに気付き立ち上がって(その大きいこと!)我々を観察し始めた。普通なら緊張して腰を抜かすところだが実はあまり心配しなかった。相棒のワシーリ氏は巨漢で足が遅いので一斉に逃げれば最初に襲われるのは彼だとふんでいたからである。彼が食べられている間に遠くへ逃げればよいのである。その日は夜 8 時頃に山小屋にたどりつくまでもう一回熊に遭遇したが、熊にしてみると我々は初めて見る変な動物なのであり、どちらの熊も我々の眼力に負けて(?)逃げていったのであった。

その他に、川を遡上中の鮭をひっかけて食べたイクラ(日本でやったら逮捕もの)、温泉が湧きだして巨大な風呂と化したカルデラ湖での洗髪(まるで銭湯の壁画)、ミルクの流れる音が聞こえそうな天の川、モスクワ大学の女学生の誕生パーティ、ウォッカのストレートの一気呑み、天然の打ち上げ花火のような夜の火山噴火、不気味な地鳴りとほっかほっかの溶岩流、人が訪れる前の夏油温泉はかくやと思わせる川沿いにおいた無数の源泉、等々ロシアの短い夏の思い出をこめて 8 月半ばに出した「エアメール」が日本に届いたのは 11 月であった。

水 沢

国立天文台

第 26 号

1997年3月発行

ニュース



真近にみるカリムスキー山頂と測量用ピラー



ペトロパブロフスク・カムチャッキーのヘリポート
向こうに見えるのがカムチャッカ富士こと
カリヤーク山



噴火を続けるカリムスキー火山と観測小屋

(関連記事P4)

国立天文台地球回転研究系・水沢観測センター

〒023 岩手県水沢市星ガ丘町2番12号

☎(代) 0197-22-7111

FAX 0197-22-7120